

教育の観点から

落合俊郎（国立特殊教育総合研究所）

まず、特殊教育へのロボット導入あるいは、老人福祉へのロボット導入について、私なりの考えかたを述べたいと思います。確かに、2005年以降、スウェーデンが持っていた人類の記録を塗り変え、日本は人類未到の超高齢化社会に突入するわけです。1960年代にスウェーデンを中心にこんなことがありました。高齢者施設や障害者施設を大規模なものにして、経済効率をよくしようと数千人規模の施設を造ったのです。そうして、手厚いケアを始めたのですが、意外な落とし穴があったのです。それは、自殺者の増加です。たぶん抽象的な言葉でいえば、人間的な関わりだとか、家族的な関わりというものが必要であるということだと思えます。そして、現在ではボランティアを多く使い、なるべく自宅で命を全うするような制度に変わりつつあります。また、高齢者を寝たきりにしないために、最近はかなり自立ということを重視したケアに変わってきて、全面的なケアというのは、末期のごく短期間に行うような仕組みになりつつあると思えます。しかし、これから直面する日本の超高齢化社会は、そんな生やさしいものではありません。人類の記録の約1.5倍から2倍の高齢者を社会が抱えていくわけです。そうすると「必要悪」としてロボットをどれほど、どの部分に限定して導入するのかというような条件の整備が必要であると思えます。つまり、障害者や高齢者の理解やケア方法が一般化したとしても、ロボット看護が必要となる可能性が高い。さらに、ロボット看護のターゲットとなる対象者は、2010年あたりから「人による」看護が行き詰まってくるとすると、この時期に70から90歳になる人は、1940から1920年代、つまり昭和15年から大正9年生まれの人々ですから、彼らに何を要求して、どのような状況に耐えられる世代なのか、心理的な分析をしなければならぬのではないかと思います。つまり、鉄腕アトム時代の人間からロボット看護に耐えられるとかそんな分析をして、ある分野は人がして、別の分野はロボットがするようなそんなガイドラインのようなものを造らないとだめなのではないでしょうか。ロボットを造る側とそれを利用する人々の世代の違いによる感覚の違いを理解するための研究を加える必要があるのではないかと思います。